

平成15年6月18日

第161回「21世紀塾」参考資料

(第15回提言)

日本一の「湯のまち」と「水の都」の連携

「21世紀塾」代表世話人 小野 徹

【問題提起】

台湾からの旅行者が新型肺炎「SARS（サーズ）」感染の疑いがあったということで、宿泊先のホテルなどは消毒や予約のキャンセルなどで大変な目にあったが、彼らの旅程は我々に貴重な教訓を教えている。

その台湾からのツアーは、まず関西空港に降り立ち、大阪のユニバーサルスタジオ・ジャパンで遊んだ後、京都の嵐山・嵯峨野を経て、天の橋立のある日本海へ。そこからずっと南へ下って姫路城へ寄ったあと、フェリーで瀬戸内の小豆島に向かい、四国の高松へ。そこからは陸路で淡路島を通過して、大阪へ戻り、再び関西空港から離日するというものであった。

近代的なアミューズメント施設、古都京都の山の辺の風情、瀬戸内や日本海の自然の造形、姫路城や大阪城などの巨大構築物、現代の土木技術の粋を集めた鳴門海峡大橋や明石海峡大橋などの長大橋、さらには最新設備の空港など、日本人の我々が見てもなかなかの旅行コースではないかと感心する。

要するに、個々の観光地に、客を寄せ付ける魅力がなければならぬことは当たり前として、それらを結ぶ回遊ルートが肝心だということだ。

これを、伊豆半島の付け根に位置する我が三島に当てはめると、『伊豆新世紀創造祭』でも盛んに『回廊』について話し合われたが、その中に「熱海～伊東」回廊はあっても、「熱海～函南・三島」回廊はほとんど話題にもなっていなかった。

考えるまでもなく、この二つの地域は、熱函道路の鷹の巣山トンネルという一本のトンネルで結ばれているとはいえ、両地域は南箱根の急峻な山で遮られ、一方の熱海は、豊富な温泉を元にした歓楽が主のまちであり、一方の函南・三島の、特に箱根山麓地域は、乳牛生産や、ニンジン、ダイコン、エビイモといった根菜類の生産で著名という実直な人柄の地域で、住民気質も全く違うが、この二つの地域は「水」という共通点を持っているのだ。

熱海の「お湯」は即ち「水」であり、「日本一の湯のまち・熱海」と、「水の都・三島」を結ぶ『新回廊』は、「水」をキーワードにすれば、大きな発展の可能性を秘めている。

そもそも、私の所属する(社)三島建設業協会自体が、それなりの経緯があるにしても、今でも三島地域と熱海地域の業者が一緒になって活動しているのだから、これを組み合わせようという試みは、夢物語ではないし、だいいち、二つの地域の個性が違うからこそ、楽しさがあり、ルートにもなる。

後ろを急峻な山で遮られているからこそ、海に面した熱海は、相模湾から昇る日の出が感動的だし、反対に、富士山や駿河湾を一望する函南・三島の夕焼けは、天下の絶景となっている。

これを組み合わせれば、ものの5分と離れていない地域で、「サンライズ」も「サンセット」も楽しめるのだし、近代日本の温泉観光をリードし、今でも日本一の数を誇る熱海の芸者衆に対し、三島には三嶋大社や、伊豆の国分寺・国分尼寺、源頼朝や北条氏の事跡などの古い歴史、それに「農兵節」で全国に歌われた「三島女郎衆」の歴史?もある。

さらにまた、「水」をキーワードにすれば、「熱海・三島」の中間に位置する丹那牛乳や、平井のスイカ(水瓜)にも、一段と脚光が浴びせられるだろうし、日本の鉄道トンネルの金字塔である丹那トンネルと、かつての水郷・丹那盆地との壮絶な水の歴史、下流の住民が水害に悩まされ、苦しんだ末に、江戸時代からは禁伐林として、ブナ、アカガシ、ヒメシャラなどが保水の役を果たしてきた函南原生林(原生の森公園)の新緑・紅葉など、水と関連した逸話・見所は多い。

ところで、だいぶ時間がかかってはいるが、いずれ、伊豆縦貫自動車道が函南町まで開通する。

ある熱海人は、ここにできるIC(インター・チェンジ)を、「『熱海西IC』の名称にしたい」などと冗談めかしに言っている。

函南町にありながら「熱海西IC」とするなど、函南町側が承知する訳がないが、このICは、確かに熱海の西の玄関口になることがハッキリしている。

そうした将来を見据えた時、今のうちから、「熱海～函南・三島」回廊の創設、「熱海～函南・三島」の交流・連携を図って行くことが、何より重要だ。

ともに伊豆への出入口である熱海・三島の両地域が、単独で頑張るばかりでなく、『水』をキーワードに、『新回廊』で、さらに魅力ある総合域となることを願うものである。

